

大和における須恵器窯跡

Sue-ware kilns of the Yamato region in Japan

植野 浩三*

Koso Ueno

はじめに

大和の地は、国家の発生を考える場合、その中心的な地域として位置づけられる。それは本格的な古墳の築造が開始された地として、そしてその展開が一時期は大阪平野に移るとはいえ、連綿と造営が繰り返されて、大型前方後円墳を含む各古墳群が形成されたこと。そして飛鳥の地を中心として宮が造られ、以降藤原京、平城京と都が造られていったことによる。

古墳時代に限らず各地の遺跡では、年代的な基準や他地域との交流を探る資料になる土器が多数出土する。生活の場での出土はもちろんのこと、祭祀、儀式の場においても数々の金属器や木製品等に混じって使用されることが多い。生活用具としての土器は、依然として各方面で重要な役割を果たしたことは明白である。

本稿は、こうした観点から、大和における生産遺跡の実態を把握し、生産の推移や地理的分布から大和の特色を探ろうとするものである。特に焼物の生産遺構には、須恵器窯の他、埴輪窯、そして瓦窯がある。窯は製品を焼く施設（空間）を本格的に造るため、その施設が崩壊したとしてもその痕跡が容易に確認でき、生産地が限定できる。特に、古代国家形成の中心舞台となった大和において、専門的な工人を要する生産集団がどのように把握され、生産され、供給されたかという問題は、当時の社会組織における手工業生産部門の位置づけとも関わり、非常に重要な問題である。それも大和におけるあり方は、政権の中心部の状況であり、日本列島の中央のあり方を直接示すことになる。大和の特色が、当時の政治・社会的な組織の構図の一端を示すことになり、周辺地域や地方との相違の比較により、より手工業生産の実情や位置づけが明確になってくると考えられるのである。

本稿は主に、最終的な目的を達成するための前提作業を行う。その中心は、大和における須恵器生産の研究史の整理であり、続いて須恵器窯の集成を行う。そして、所属時期や内容について整理し、全体的な変遷を捉えていきたい。須恵器窯の出現や衰退の検討は、大和の特色を直接示すことになるが、それが大和のみの特色なのかという問題は、古墳時代以降の大生産地である陶器窯や地方窯の展開とも関係するため、即断は避けたい。ここでは、手工業生産との

関係についても若干検討するが、見通しを述べるだけ留めておく。不備な点は、改めて別稿にて補足したいと考えている。

なお、瓦窯・埴輪窯についてはすでに優れた論考があるため、本稿では必要なものしか取り扱わない。先学の論文を参考にさせていただきたい。

I. 大和における須恵器生産の研究抄史

大和の須恵器窯は非常に少ない。現在までに確認されているものは、31ヶ所であり、他地域と比べると圧倒的に少ない。この現象は後章で触れるが、それに付随して調査例もきわめて少ない。むしろ宮都や寺院に関係する瓦窯の調査例が圧倒的に多いのは、当地の特徴である。従って、研究史もそれに準じるが、以下、その概要を記しておこう。

大和における須恵器窯の調査は意外と早く、1923（大正12）年、生駒市乾神山において窯の灰原が偶然に発見され、近所から和同開珎も出土したことに始まる。当時、奈良女高師の教授であった水木が、土地所有者の依頼を受けて現地を調査し、調書をつくっている（上田1926）。調書では、発見場所の略図を作成すると共に、歪んだものや重なって熔着しているものが存在したことから、当地を土器製造地と判断した。そして、当遺跡は大和において土器の製造地の初めての発見と記している。

その後、1925（大正14）年になって、上田三平が水木の調書をもとに、同地を再調査し、翌年水木の調書と調査の報告をしている（上田1926）。再調査では、七尺ほどの窯体と見られる痕跡を確認し、遺物は「一個の標準となるもので、随て其遺物の様式形状は比較的細密に分類し置く必要がある」として、出土遺物の状態や種類と法量を細かく記録している。そして古墳出土の祝部式土器と違うことから、それ以後の時代のものと考えた。同時に出土した和同開珎の時代に近い時期の生産地であると指摘し、当遺跡の重大性を述べている。

その後、大和における須恵器窯の調査はさほど机上にあがってこない。1938年、田中重久が三郷町平隆寺の創建時の瓦窯として今池窯跡を紹介した。同窯跡では、同時に土器片の散布を見ることから、瓦窯と同時に土器の窯であった可能性を述べている（田中1938）。

戦後になると調査例は増えてくる。1959年には岸熊吉が窯業遺跡の集成を試みている（岸1959）。そこでは、窯構造の違いを指摘し、その変遷を述べた。特に、五條市荒坂窯跡の調査に基づいて、同窯の報告を中心にした。この段階で確認されていた窯跡は21ヶ所に及ぶが、そのほとんどが瓦窯であった。その中で荒坂窯跡と勢野窯跡（今池・辻ノ垣内窯跡か）が、一部須恵器も焼いていたとしている。瓦窯の集成が中心であったとはいえ、網羅的に窯業遺跡を取り扱った点において、研究史上に記録されなければならない。

その成果を受けて小島俊次は、1965年に『奈良県の考古学』の中で窯跡について紹介している。内容的には、新たに発見された窯も加えられているが、やはり瓦窯がその大半を占める。しかし、調査したものの成果を詳しく記している。須恵器窯跡については、五條市今井、天神山がその可能性をもつとし、その他土器を焼いた窯としては、香芝市屯鶴峯東方畑地と桜井市

方ヶ坂、香芝市平野をあげているが、平野以外については今日では定かではない。

1964・65年には、奈良盆地北端部に位置する奈良山丘陵一帯の分布調査が行われた。これは、団地造成計画（平城ニュータウン）に伴うものであったが、600haの広範囲にわたっている。その中で瓦窯跡、その他の遺跡が数多く確認され、1972年には造成地内の予備調査が一部行われている。須恵器窯に関しては、京都府との境に位置する場所で4基が確認され（歌姫西瓦窯跡群）、その一部が調査された（奈文研1973）。いずれも7世紀前半から中頃の時期である。また、押熊瓦窯跡群の中でも、8世紀前半代の焼け歪んだ須恵器片が出土しており、瓦生産以前に須恵器が生産されていた可能性を指摘した。平城ニュータウン予定地内および周辺地域で確認した窯跡の多くは、やはり平城宮・京関係の瓦窯であったが、須恵器窯の発見はこれまで不明であった当地域の須恵器生産の存在を明らかにした。そして瓦生産そのものが、当地にそれ以前に存在していた窯業を基盤として引き継がれたとする見通しを立てた点で、きわめて重要な発見であったといえよう。

1960年代以降は、皮肉にもこうした大規模開発に伴って窯跡が検出されていき、徐々に全体の様子が明らかになっていった。

1973年、吉田恵二は、生駒市俵口（俵口南）窯跡の現地調査を行っている。窯体の位置は確認できなかったが、窯体片と共に灰と須恵器が散乱しており、その採集遺物を報告した。奈良時代後半期のもので、平城京の出土資料や、大阪陶邑窯の須恵器と酷似するとした。ここで初めて生駒谷窯跡群の系譜や、供給地の推定が示唆された（吉田1973）。

同年、生駒谷に北方に存在する北田原（イモ山）窯跡群の一部が報告された。この窯は1936年に既に発見されていたようで、1966年に調査された。6基の窯跡が2群に分かれて存在し、いずれも平窯であるが、瓦と共に須恵器も焼成された（中井1973）。

1977年には、白石太郎が既に知られていた生駒谷窯跡群や北田原の窯跡群に、新たに4基の窯を加えて報告し、再検討した（白石1977）。これは当地域で、窯跡を群として捉えようとした初めての試みである。そして、生駒谷窯跡群は、天平宝字から奈良時代末年の限られた期間に操業されたとする見解を示した。そして、6世紀前半代の五條市今井窯跡や、6世紀後半代の平野窯跡を含めた県内の窯跡の概要を記し、「とりわけ奈良盆地では、5世紀から奈良・平安時代に至るまで、散発的に須恵器の生産が行われることがあっても、ある程度永続的で大規模な須恵器生産は全く見られないのである」として、総合的な検討に迫っている。これは、大和における須恵器生産の状況と特色について指摘した最初の論考と言えよう。今日にあっても大和の状況はほぼ同様であり、先駆的な内容として評価できる。さらに、大規模な生駒谷窯跡群が成立した点に注目し、それには奈良山丘陵の瓦窯、平群郡との関係、そして陶邑窯との関係を今後検討する必要があるとし、全体的な見通しを立てている。

その後、生駒谷では、1983年に俵口北窯跡の灰原が調査された（藤井1983）、藤井は生駒谷窯跡群は平城宮への供給窯の性格をもつと示唆した。さらに1988年には、生駒市教育委員会による分布調査が行われて新たに窯跡が加えられ、全体的な窯の分布が徐々に明らかになっていった。特に、生駒谷と水系を違える富雄川上流域（高山町山田）においても窯跡の存在が濃厚と

なり（山田窯跡）、広範囲に窯跡が存在することが判明した。その一部は、部分的な調査や磁気探査され、正確な場所が確定していった（錦・木村1988、錦・木村1989）。

次いで、これまで未確認であった生駒市高山町においても窯跡の灰原が確認され（高山1号窯跡）、新たに2基以上の窯が予測できるようになってきた。この調査によって当地域の須恵器窯は、その南部の山田窯跡を加えて、富雄川上流域の広範囲に広がることが確かめられた（本村・重見1998、林部・重見1999）。このように、生駒市域においては、1980年代以降、次第に全体的な様相が明らかになった。

香芝市平野窯跡は既にその存在は知られていたが、1974年に篁園勝男によって採集須恵器が報告され（篁園1974）、当時としては奈良県最古（6世紀後半）の窯跡になるとした。その後、平野窯跡は1983年に発掘調査され、計5基の窯跡の存在が確認された（千賀1983）。1～4号窯跡が須恵器窯、5号窯跡が瓦窯と判明した。調査は1・4・5号窯跡について行われ、須恵器窯は6世紀末の様相を示し、県内では稀有な調査例とした。

1984年には、三郷町平隆寺の近隣でツクシ山窯跡が確認された（白石・亀田1984）。今池窯跡群の南方に存在し、7世紀初頭の須恵器が採集された。さらに、ツクシ山窯跡にほど近い勢野・辻ノ垣内窯跡が1996年に調査された。4基の窯跡が知られ、そのうち3号窯跡が7世紀初頭の須恵器窯で、他はやや遅れる瓦窯であるという（檀考研1996）。平隆寺を中心とした周辺の窯の実態が明らかになっていった。

1984年、奈良市の東部においても須恵器窯が確認された。これは横井廃寺の瓦窯として以前から4基の存在が確認されていた場所である。須恵器は以前にも知られていたが、今回の調査で1号窯において須恵器が出土し、当窯跡群は確実に須恵器も焼いていたことが判明した。当初は瓦を焼いていたが、後半（7世紀後半～8世紀初頭）になって窯を改造して須恵器も焼くようになったようである（西崎・中井・立石1985）。瓦窯から須恵器窯へ移った状況が分かる貴重な例であり、歌姫西窯跡群と共に、奈良市域で数少ない須恵器窯跡として特記される。

大和において最古の須恵器窯について触れられるようになるのは1980年代以降である。1979年には、泉森皎が五條市今井窯跡について古墳時代後期の前半代の年代が推定されるとしているが、これは1971年度の分布調査で確認されていたものようである（白石1977）。

1980年には、関川尚功が五條市今井窯跡の図面資料を紹介し、MT15型式に属する大和最古の窯跡と位置づけた。操業は短期として推測し、市内の古墳に供給した可能性を述べている（関川1980）。さらに関川尚功は、1984年に奈良県下の初期須恵器を論じた中で、五條市今井窯跡は陶邑での技術が定着した後に伝播された地方窯成立の一環として捉え、古墳の築造と関係して生産が成立したと考えた（関川1984）。ここで初めて、大和における窯の成立とその契機についての指摘があった。

一方、泉森皎は1987年に、大和の「須恵」の地名と五条市域の窯跡群との関係、生産の展開について論考している。五條窯跡群と総称される窯跡群は、位置関係の遠近はあるが10地点に分けられ、1933年に行った岸熊吉の荒坂窯跡の調査や、1959年の窯業遺跡の集成、関川の論考、そして岸以降の窯跡検出の経過を紐解き、各窯跡の概要を述べている（泉森1987）。中でも、

今井窯跡に加えて荒木神社裏山窯跡が最初に成立した窯であり、MT15型式の段階とした。その後しばらく空間があるが、天神山窯跡がTK217型式段階、荒坂窯跡の一部が7世紀中頃から後半、南仙山窯跡が8世紀前半代へと推移するとした。また、窯跡群は瓦窯を伴っていることが特色であり、須恵器の生産から瓦生産に移行して、併行して須恵器も生産され、都の瓦生産の需要に応えるために須恵器工人が動員されたとした。五條地域は奈良県の南端にあり、奈良盆地とは一線を画する地域ではあるが、白石の見解を補いつつ、大和の須恵器生産の動向を論じた点において評価できよう。

最後に、大和の窯跡を概観したものに藤原学・中村浩の『須恵器集成図録』がある。大和の代表的な資料を掲載した。この中で、大和の窯跡数は他に比べて最も少ない県に属するとした。これは、「倭政権が須恵器生産組織を具体的にどのように把握したかという古代史上の問題」としている。そして、王権の本拠地であったにもかかわらず、「大和における各窯は須恵器生産の開始時から一地方窯の範囲を脱却できなかつた」とし、大和の窯を地方窯の一つとして見る見解を示している（藤原・中村1996）。

以上のように、大和における窯跡の調査は古くから行われているものの、須恵器窯の数は圧倒的に少なく、むしろ瓦窯に関するものが多い。従って、須恵器生産に関する論考もこれに準じている。全体的な動向は白石がまとめたように、現在の状況もさほど大差ない。この散発的な要因の理解が重要なポイントであり、そして新たに出現した6世紀末葉～7世紀前半、そして8世紀代後半代の現状把握が大和における須恵器生産の展開を探る手がかりになりそうである。こうした推移を整理して、総合的に検討していくことが重要になってこよう。

II. 大和の須恵器窯跡

次に、各窯跡の概要について整理しておこう。参考文献の記載がない場合は前章の項目と共通している。位置関係については図1を参照のこと。

(1) 五條窯跡群

五條市内には瓦・陶合わせて計10地点の窯跡が知られている。このうち須恵器窯跡は6地点となる。現市街地の北東約1kmの位置に、今井窯跡、荒木神社裏山窯跡、天神山窯跡が隣接しており、その他の窯跡はこれらの窯跡を中心にして放射状に分散している。荒木神社裏山窯跡は3基の窯が存在するようで、窯体の一部が崖面で確認されている。採集遺物は蓋杯が多く、その他に甕、壺、高杯、器台があるという。杯は、丸みをもつ底部と口縁端部に面をもたせるものがある。蓋は退化した稜であるが、幾分つまみ出す傾向が見られ、両者の特徴からMT15型式に相当するようである。尚、若干時期の下るものも含まれている。

今井窯跡は荒木神社裏山窯跡の南東約300mの地点にあり、灰原が確認されている。蓋杯の他に高杯、壺、器台と装飾付き壺の一部が採集されている。蓋杯は全体的に端部が丸くなっており、やや新相の傾向があるが、その一部は荒木神社裏山窯跡のものによく似ており、MT15型式からTK10型式に至る段階と考えられる。

天神山窯跡は、瓦、鷗尾片と共に須恵器片が採集されており、瓦陶兼業の窯と考えられる。提示された須恵器は杯1点であり、口径が小さくて立ち上がりの極端に短いもので、7世紀中頃と考えられる。

荒坂窯跡群は、計11基の窯が確認されており、瓦窯が主体のようである。今井窯跡から北西に約2kmほど入り込んだ丘陵地帯に存在し、大きく立地が異なっている。1号窯は全長9.1mの有段式の窖窯であり、川原寺と同型式の瓦が出土している。その焚口付近から須恵器も出土している。7世紀中頃の時期であろう。また、5号窯からも須恵器が出土しており、7世紀後葉に比定できるといえる。

阿田窯跡群は荒坂窯跡群と反対方向に深く入り込んだ場所に位置する。2基の窯跡が存在するようで、小型の高台付杯が出土したという。7世紀後半代の可能性がある。

南仙山窯跡は、今井窯跡から西方に約3kmの地点にあり、荒坂窯跡群、阿田窯跡群とも地区が異なる。1基のみが確認されており、8世紀中頃のものであろう。杯、壺、甕が出土しており、瓦は出土していない。

その他、瓦窯として岡窯跡（7世紀後半）、牧代窯跡群（7世紀後半）、居伝窯跡（8世紀代）、西山窯跡（7世紀後半）が存在し、周辺地の須恵器の生産と併行して操業をしている。牧代窯跡群ではかつて須恵器片が採集されたと言うが、定かではない。

五條窯跡群を概観すると以上のようなようであるが、6世紀前半から生産が開始し、以後、空白もあるが8世紀にかけて連続して操業が行われた可能性がある。そして、7世紀中頃から8世紀にかけて瓦を共に生産した点において特色が見られる。一時期は瓦の生産が主流であった可能性ももたれるが、一方で南仙山窯跡が示すような須恵器単独の生産も行われており、上部からの強制や需要に応じて協業していた点が重要であろう。瓦の需要に応えるべく、当地において生産が行われた状況が読みとれるのである。

(2) 平野窯跡群

香芝市平野に所在する。同一丘陵には平野古墳群が存在し、両者の有機的な関係が指摘される。1974年の範囲確認調査で1～3号窯跡が明らかになり、1983年になって1号窯跡が調査された。さらに丘陵を移して4・5号窯跡の存在が道路工事によって確認され、同年調査された。このうち須恵器窯は1～4号窯跡であり、5号窯は瓦窯であることが判明した。1号窯跡は現存長8m、燃焼部幅1.3m、焼成部幅1.85m、焼成部傾斜角度25度を測る。2回の床面修復が認められると言う。二次床面には蓋杯が大半を占めるもの、壺、大甕、高杯、甕が若干含まれているという。概ね、TK209型式に該当する。

4号窯跡は煙道の一部のみが遺存していた。1号窯跡とほぼ同時期ないしはやや遡る須恵器が出土したという。5号窯跡は有段式の窖窯であり、瓦を焼いている。4号窯の一部を削平して造られている。須恵器窯の後、しばらく時間が空いているようである。なお、瓦窯の製品は、近隣の尼寺に供給された可能性があるという。

(3) 今池窯跡

今池窯跡群は生駒郡三郷町勢野に所在し、3基以上の窯が存在する可能性がある。平隆寺削

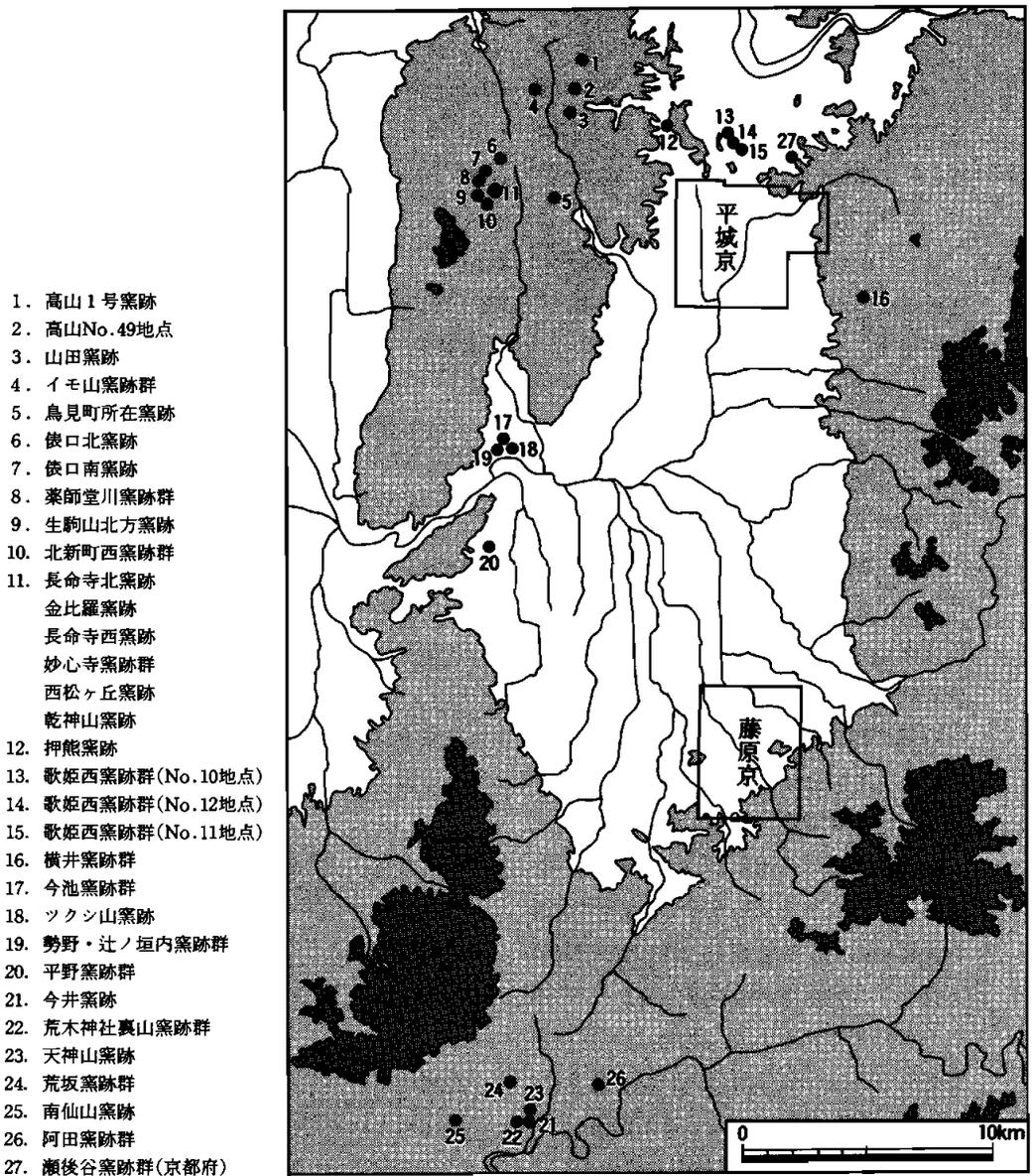


図1 大和の須恵器窯跡の分布

建時の瓦窯として古くから知られていた窯跡群であるが、本格的な調査がされておらず詳細は不明である。ただし、1938年に田中重久は同時に須恵器散布を見ることから、須恵器を共に焼いた兼業の可能性を示しており、参考資料になる。

(4) ツクシ山窯跡

ツクシ山窯跡は、三郷町秋留に所在し、平隆寺北北東約400mにある。丘陵の西斜面において窯体の付着した須恵器が採集されたため、窯跡と確認できた。瓦も共に採集されているが、同

じ窯で焼いたものかは不明である。採集された須恵器は、TK217型式（古）に該当するもので、蓋杯の他に、壺、台脚があり、蓋には内面に返りの付く逆転した形状のものも含まれている。台脚は壺に付くものであり、TK209型式頃から認められるようになる。

採集瓦の存在、及びこれに続く今池窯跡群との関係を探る資料として本窯跡の存在は貴重であるが、窯体の調査が行われていないので詳細は不明と言わざるを得ない。

(5) 勢野・辻ノ垣内窯跡

生駒郡三郷町勢野に所在し、4基の窯が確認されている。ツクシ山窯跡とは平隆寺を挟んで近距離であり、同一の窯跡群として捉える必要もある。検出された4基の内、3号窯跡が須恵器窯跡であり、全長8.5m、幅1.8mの地下式窰窯である。3号窯跡からは、TK209からTK217型式にかけての須恵器が出土しており、ツクシ山窯跡とはほぼ同時期である。残りの3基は瓦窯であり、少し時期を隔てて、7世紀第3四半期の時期に該当し、2号窯跡→1号窯跡→4号窯跡の順に築かれているという。

(6) 横井窯跡群

奈良市横井町に所在する。本来、窯の南側に存在する飛鳥時代の寺院跡である横井廃寺の瓦窯として4基が知られていた。偶然にそのうちの1号窯が調査されることになった。燃焼部と焼成部のほとんどが破壊されているが、焼成部と煙出しの一部がわずかに残存する。4回の貼床を認め、瓦と須恵器が出土している。調査の結果、最初は瓦を生産し（7世紀第2四半期）、その後須恵器窯に造り替えられ、7世紀の後半期から一部8世紀初頭まで須恵器が生産されていたようである。その他の窯についての詳細は不明である。

(7) 歌姫西窯跡群

旧町名では奈良市歌姫町に所在し、現行政区画では奈良市朱雀から左京の一部になる。当窯跡群は、奈良市北郊の丘陵一帯に計画された平城ニュータウンの事前調査によりその存在が明らかになった。調査概報では、須恵器窯跡と同地点（12地点）に所在する瓦窯跡を歌姫西瓦窯と命名しているため、本稿でもこの名前を使用することにする。一部では「奈良山丘陵窯跡群」としているものもある（藤原・中村1996）。

明らかになった須恵器窯跡は、奈良山丘陵の北裾部にあたり、北側には山城盆地が広がり、木津川が望める場所に当たる。調査時のNo.では、10・11・12号地点の3ヶ所に分かれて窯が存在しており、100m内外の距離を置いて存在する。10号地点では1基の窯があり、全長10m、幅1.4mの規模をもつ。須恵器は7世紀中頃の時期という。

11号地点では1基の窯跡が存在する。全長13m、幅1mの長大なものである。宝珠形つまみを付けた杯蓋は、内面の返りが短くなる。杯は外方に踏ん張る高台をもつ。10号地点窯跡と同様に7世紀中頃前後の時期であろう。

12号地点では2基の窯跡が存在する。2.5mの距離を置いて並列して造られており、煙出しと焼成室の奥壁を検出したという。灰原は重複しているが、ほぼ同時期に造られたようである。同地点では、古墳時代タイプの杯が出土しており、7世紀前半代の可能性をもつ。

(8) 押熊窯跡

旧町名では奈良市押熊町に所在し、現行政区画では奈良市神功になる。奈良山丘陵の西北端に位置し、京都府との境界近くにある。調査時にはNo. 2号地点である。6基の瓦窯が検出されており、これらはいずれも平窯であり、8世紀後半代に属する。明確な須恵器窯は検出されていないが、5号窯南方より焼け歪んだ須恵器が多数出土したため、須恵器窯の存在が濃厚とされる。出土須恵器は、8世紀初頭の時期の特徴を有しており、瓦窯より早くにこの地点で操業が行われていたと考えられる。

(9) 生駒谷窯跡群

近鉄生駒駅の北西方向、生駒山の東麓にかけて多くの窯跡が知られている。生駒谷を流れる竜田川の西岸に当たる。古くは前章で述べた乾神山窯跡が1926年に上田三平により調査されたが、その後次第にその数を増していった。この一帯は市街地となっているため、全体的な把握が難しく、工事中などの偶然の発見が多く、現在では11地点に分かれて存在する。北から俵口北窯跡、俵口南窯跡、薬師堂川窯跡群、長命寺北窯跡、金比羅窯跡、長命寺西窯跡、妙心寺窯跡群、西松ヶ丘窯跡、乾神山窯跡、北新町西窯跡群となり、やや東方に外れた高位部に生駒山北方窯跡がある。いずれも生駒市俵口町から西松ヶ丘、北新町にかけての2.5kmの範囲に集中して存在する。生駒谷窯跡群では、窯体の調査をしたものは極く一部であり、ほとんどが灰原の検出によって窯の存在が確かめられている。

このうち、生駒山北方窯跡は1987年に調査が行われており、長径2.2m、幅1.6mの地下式の平窯を確認している。その他、付属の施設として排水溝2条と石組遺構1基、そして性格はわからないが窯状遺構1基が存在するという。

妙心寺窯跡群では、半地下式窖窯2基と灰原が確認され、薬師堂川窯跡群でも半地下式窖窯を確認した。最南端に位置する北新町西窯跡群は、発見の状況から数基存在することが言われており、後の調査で半地下式窖窯1基が確認されている。

少なくとも、生駒谷窯跡群は半地下式窖窯が主流と考えられるが、生駒山北方窯跡のように一部では平窯が構築されていることがわかる。そして、灰原も広範囲で確認出来るものもあり、妙心寺窯跡群、北新町西窯跡群では複数の窯が存在している。実際には、相当数の窯跡が存在したことが推測できよう。時期的には、全てが8世紀中葉から後半代にかけてである。

(10) 富雄川上流域の窯跡群

生駒市高山町から奈良市にかけて4ヶ所の窯跡（推定地）が確認できる。生駒谷窯跡群と近接距離にあるが、生駒谷窯跡群が竜田川流域に展開するのに対して、当窯は富雄川の上流域に存在する窯である。大きくは両者を生駒山東麓窯跡群として総括できる。

生駒市北田原町イモ山に所在するイモ山（北田原）窯跡群は、富雄川西岸の竜田川と富雄川に挟まれた緩やかな丘陵の中央部にある。生駒谷窯跡群北端の俵口北窯跡からは、丘陵を隔てて直線距離で約3km離れている。6基の窯が検出されており、尾根を隔てて3基ずつの2群に分かれるという。いずれも半地下式の平窯であるようで、窯体内や灰原から須恵器とともに瓦が出土している。その内の1基（旧称I群）は長径1.8m、短径1.4m、焚口幅0.5mを測る杓

子状を呈し、奥壁中央部に煙出しを設けている。焚口は石や瓦を用いて造り、燃焼部と焼成部は区別なく平坦である。さらに旧称Ⅱ群1号窯は、煙出しを側壁に付けた特異なものであるという。8世紀末頃の時期に該当する。当窯でどれほどの須恵器が焼かれたかは不明であるが、生駒山東麓窯跡群の中で確実に瓦を併焼している唯一の例である。

富雄川東岸には、高山地域にまとまって窯が存在する（生駒市高山町）。いずれも土地区画整備事業の試掘調査であるため全容は不明であるが、高山地域では2ヶ所において窯の存在が濃厚であるという。確実に灰原を確認した高山1号窯は、溝状遺構から大量の須恵器片が出土し、現在のところ最北端に位置する。その南の調査区（49地点）においても窯体片や須恵器を出土しており、窯跡の存在が説かれている。

さらに、南部の高山町山田においても焼け歪みのある須恵器が採集されており、窯跡と推測されている（山田窯跡）。このように、現在は散発的であるが、高山地域の窯跡はさらに南側に広がる可能性があり、富雄川最上流から国道163号線の南域をふくめた富雄川東岸一帯の広範囲に窯が築かれていた可能性が高い。時期は8世紀末葉から9世紀にさしかかる。

富雄川を少し下った奈良市鳥見町においても窯跡が存在したらしい。現在の近鉄富雄駅西方の丘陵である。詳細については定かでないが、高山地域の窯跡とはほぼ同時期のものである（白石1977）。今後、高山地域との間にも窯が確認される可能性もたれる。

Ⅲ. 須恵器窯跡の特徴

以上のように、少数ではあるが大和の窯跡について概観してきた。こうした窯跡を考える場合には、(1)時期的なあり方、(2)地域的なあり方、(3)そして供給先との相互関係の整理が重要であり、次いで(4)生産集団の把握形態の検討や、(5)その背景、その他を検討していく必要があろう。ここでは、(1)～(3)について整理してしておきたい。

(1) 時期的変遷

5世紀代 5世紀代に遡る須恵器窯は現在のところ皆無である。大和において初期須恵器の出土遺跡は多数に及ぶが（関川1984）、窯跡の候補地は知られていない。また、全国的に拡散が行われるTK23型式、そしてTK47型式の段階の窯も知られていない。

6世紀前半代 大和における須恵器窯の最古例は、五條市今井窯跡、荒木神社裏山窯跡である。MT15型式の特徴を一部もつ須恵器が採集されている。両者は至近距離にあるため、一つの窯跡群として捉えられよう。MT15型式の窯が、大和盆地の中央部ではなく、五條地域に成立したことが非常に興味深い。この地は、紀ノ川水系に属し大和盆地より外れている。今のところ今井窯跡と荒木神社裏山窯跡の2基が知られるが、その製品の一部は周辺地域に供給したとしても、やはり五條地域を中心に供給されたのであろう。

6世紀中葉～後半代 五條市今井窯跡、荒木神社裏山窯跡では、TK10型式に近い須恵器も採集され、荒木神社裏山窯跡ではその後の須恵器も少数存在するようであり、小規模ながら存続していた可能性が高い。その他の地域では、この時代の窯跡は確認されていない。

6世紀末葉～7世紀初頭 この期になると、五條地域から外れて新たな窯跡が現れてくる。香芝市平野窯跡、三郷町ツクシ山窯跡、勢野・辻ノ垣内窯跡が確認できる。ツクシ山窯跡と勢野・辻ノ垣内窯跡は至近距離にあり、同一群で捉えられよう。いずれもTK209からTK217型式にかけての段階であり、この時期に少数ではあるが盆地内で新たな須恵器生産が開始しており、一つの画期として捉えられる。

7世紀前半代 7世紀前半代から中葉にかけては、窯の数が増加する。五條窯跡群においても天神山窯跡と荒坂窯跡で確認でき、歌姫西窯跡群もこの時期から操業が確認でき、大和盆地北部でも生産が成立していることが確認できる。

7世紀後半代 この時期には、五條窯跡群で引き続き操業が行われており、荒坂窯跡、阿田窯跡が確認できる。また、奈良市横井窯跡が新たに加わる。

8世紀前半代 この時期には五條窯跡群の南仙山窯跡が8世紀中頃に存在するが、前段階からの状況から考えて、五條窯跡群では前半代を通して操業されていた可能性がある。奈良市横井窯跡では、前代から引き続き8世紀初頭まで操業されていたと考えられ、押熊窯跡も8世紀初頭頃に操業されていた。

8世紀後半代 この時期には、これまでの密度では考えられない集中度を見せている。とはいっても、その場所は生駒山東麓部一帯に限られる訳であるが、窯の数においては急増している。生駒山東麓部一帯では、まず生駒谷窯跡群で最初に操業が始まり、その後、水系が変わるが北田原、高山地域に窯が出来ている。限られた資料で判断すれば、生駒谷窯跡群の金比羅窯跡・妙心寺窯跡がほぼ8世紀中頃前後に開始し、その後、俵口北窯跡・俵口南窯跡・北新町西窯跡、そして薬師堂川窯跡・北方窯跡の順に操業していたようである。薬師堂川窯跡・北方窯跡は奈良時代末葉の時期であり、この頃に富雄川流域の山田地域でも操業が開始される。その後も、生駒谷では1・2基が操業していたようであるが、平城京遷都後は高山地域で操業されるようになり、生駒谷から富雄川上流域へとその生産地が移動していったことがうかがえる。

8世紀後半代以降の窯の数は、前章でも記したように大和における約半数に及び、非常に特徴的であり、この時期が大和における一つの変革点と言えよう。

(2) 窯跡の分布傾向

時期的な変遷とも関係するが、窯跡の分布について見てみよう。大規模生産地として判断できるものは、五條窯跡群と生駒山東麓部の窯跡群であろう。五條地域では、6世紀前半から操業を開始し、その後空白があるものの8世紀にかけて長期間生産が行われている。6世紀代の古墳及び集落への供給から始まり、7世紀以降は寺院・宮都と関係して瓦を伴う生産を併行しているが、都への瓦供給を除けば、比較的小地域のまとまった窯跡群として判断でき、宇智郡を範囲とする在地的な生産地と考えられよう。

第二の集中地点は、生駒山東麓部の窯跡群である。当地では、生駒谷から富雄川上流域の小範囲に限って認められ、かなり集中した生産が予想できる。それも、8世紀中頃に突如として成立し、以降半世紀間の限られた期間に操業されている。当地域は、平地に恵まれた場所ではなく、多くの需要は期待できない。そうした場所での生産は、やはり他所での大量の需要が背

景にあったと考えられる。そうした点で当地域の生産は、五條地域のような在地的なものではなく、頗る集中的であり計画的である。平城京との関係が古くから言われており、地理的に近距離である生駒谷、富雄川周辺が生産地として存在した。

その他の地域では、散発的である。数基で構成されるものが多く、長期間継続するものはほとんどない。奈良盆地西部の三郷町、香芝市、北部の奈良市に限って分布し、6世紀末から7世紀前半に開始している。比較的小地域を対象として成立した状況が読みとれる。同じ様な窯跡は、多くの古墳群をかかえる盆地の東部や南部等の地域にも存在した可能性もあるが、現在のところ定かではない。こうした現状が、実際のあり方なのかは不明であるが、仮に新たに発見されたとしても、現在の状況から判断して、小規模な生産の可能性が高い。

7世紀後半代から8世紀初頭にかけては、奈良市域でも点的に存在する。横井窯跡と押熊窯跡であり、五條地域を除いて両窯に限定されるし、その規模も極めて小さい。

以上のように、窯跡の分布状況は散在的である。古墳時代においては五條地域が濃厚であり、その後、盆地の東部と北部に点在する。そして、盆地東北部では、8世紀後半代から点的状況から脱して、急激に分布が集中するようになる。

(3) 供給地との関係

時間的、空間的な状況から推定できる生産地と供給先の予測をすると、以下のようになる。五條地域においては既に述べたように、ほぼ旧宇智郡を範囲とする供給先が考えられ、古墳群や集落で使用された(関川1980、泉森1987)。もちろん周辺地域への移動も考えられるが、それは大勢に影響を与えるものではない。一般的に、五條地域でのあり方が各地方の状況にふさわしいのであるが、大和盆地の中心部においてはあてはまらない。

6世紀末葉の平野窯跡群や勢野・辻ノ垣内窯跡、ツクシ山窯跡は、生産の基盤が以前からあったのかどうかは不明であるが、後期群集墳の最終段階に出現する。平野窯跡群は、同一丘陵に平野古墳群が存在するため、同古墳群の一部に供給されたことは明らかである(篁園1974)。しかし、その古墳の数は10基に満たず、生産量からして周辺の地域に供給された可能性がある。やや離れるが、東側に広がる馬見丘陵一帯の古墳群も候補になる。

勢野・辻ノ垣内窯跡、ツクシ山窯跡は平群谷に属する。しばらく後には、平群谷唯一の飛鳥寺院として有名な平隆寺が近所に建立される。そうした環境に須恵器窯が成立することは、重要な地点であったことがわかる。おそらく平野窯跡と同じく、近隣の古墳群、集落への供給が主体であったと考えられる。

歌姫西窯跡群は、周辺に点在する古墳が供給先の候補であるが、群集するものは少なく、歌姫町、山陵町を含めてもその範囲は狭い。やや時期は下がるが横井窯跡、押熊窯跡についても同様のことがいえ、近隣の小地域を対象とした供給が考えられるのである。

一方、生駒山東麓一帯の窯跡群は、その成立の特殊性や集中度、また所在地の状況から見て、在対を対象とした供給とはいえない。これには既に先学の指摘があるように、平城京へ供給したことは間違いない。平城京から比較的近所の生駒谷や富雄川流域が生産地として選ばれ、操業を開始した。そして、約半世紀間にわたって操業されている。特に、長岡京遷都後も継続し

ている点において重要であり、需要は減っても生産の必要性が存在した点が重視される。8世紀中頃に突如として成立したことは、種々の検討を要するが、それ以前の生産地、例えば大阪陶邑窯の生産推移や、社会情勢を考える必要がある。とはいえ、現実に平城京を主な供給地として集中的な生産が行われており、明らかに都市に付随した生産として位置づけられる。この点が、上で述べてきた小地域を対象とした生産地とは大きな違いがあるのである。

おわりに

本稿は、大和における須恵器窯跡の基礎的資料を収集し、その整理・検討を通じて須恵器生産の実態把握と特色を抽出するのが目的であった。資料に関しては、一応の収集を果たし、それに基づいて若干の指摘を行った。しかし、総合的な動向を深く追求するには至らなかった。これについては別稿で改めて行うことにし、以下、若干のまとめをしておきたい。

現在のところ、5世紀代における須恵器生産は、大和において認められない。将来的に発見されることも予測されるが、それは単発的な操業であろう。筆者は、存在しても初出期のTG232型式段階が妥当と考えている（植野1993）。むしろ5世紀代あるいは6世紀を含めて、須恵器窯が存在しないことが大和の特徴ではないかと考える。詳細は別稿に譲るが、生産地を有しなくても多量の須恵器を入手し得た状況が考えられるのである。これは陶邑窯経営と大きく関係し、中央政権や有力豪族との関係において、政治的・社会的に可能であったのであろう。手工業生産が中央の組織の中でどのように組み込まれていたかが関係し、これに大和の地域も参画していたと考えられる。

五條地域における状況は、こうした判断からずれてくる。これは、五條地域が紀ノ川水系に属し、大和盆地からはずれていることが原因であろう。大きくは大和の勢力範囲に属するのであろうが、やはりその圏外の在地的な存在であったと考えられる。そのため、関川が説くように各地の地方窯成立と同じ現象として捉えられる（関川1984）。そして、以後継続して操業が行われる各地でのあり方と符合している（植野1998）。

こうした、五條地域の展開と同様なものは大和にはない。次に現れるのは6世紀末葉であり、この時期に大きく2ヶ所で確認できるため、これが大和盆地における出現の画期であろうか。そして直後に歌姫西窯跡群が成立することも偶然ではないと考えられる。群集墳への供給と関係するし、飛鳥文化の開始期にも符合する。日本における須恵器生産の画期と拡散とも重複する点で、因果関係が推定できる。

最後に、瓦生産との関係について触れておきたい。7世紀以降、同一窯、あるいは須恵器窯の近隣で瓦を生産しているものが多く認められる。五條窯跡群では須恵器生産の延長上で瓦を生産し、一時期は瓦の生産が主流のような状態を見せている。平野窯跡においては、数十年後、近隣の尼寺へ供給した可能性をもつ瓦を同一丘陵で生産し、勢野・辻ノ垣内窯跡、ソクシ山窯跡でも後に平隆寺瓦窯として今池窯跡が近隣に出来る。横井窯跡は、瓦窯が先行するようであるが、須恵器も焼いている。

また、須恵器生産後、やや時間は空くが、歌姫西窯跡群、押熊窯跡群でもよく似たあり方を見せており、生駒山東麓一帯の窯跡群では生駒市イモ山窯跡群で唯一瓦を焼いている。この様に見ていくと、窯業生産の母胎が存在した、あるいはかつて存在していた地域において、瓦の生産が組み込まれていった傾向が読みとれる。瓦生産には、須恵器工人が直接的あるいは間接的に関係していたことは充分予測できる。

最後に、奈良山丘陵から京都府木津町にかけては、多数の瓦窯が存在する。その中には、上人ヶ平遺跡の南側に存在する瀬後谷遺跡のように、瓦と共に須恵器も生産しているものがある（石井他1992）。瀬後谷遺跡では5基の窯が存在するようで、このうち3号窯跡が須恵器を中心に生産しているが、他の窯跡でも須恵器が少量出土しており、その展開が注目される。いずれも平城Ⅲ期前後が中心であり、上記で述べてきた展開と有機的に関係することは間違いない。当地域でのあり方は、大和の窯跡と合わせて、今後の課題としておきたい。

<参考文献>

- 泉森 峻 1979「五條市周辺の窯跡」『奈良県観光』第268号
 泉森 峻 1987「大和の須恵と窯跡群」『横田健一先生古稀記念 文化史論叢』（上） 創元社
 上田三平 1926「奈良県生駒町の古代陶窯遺跡」『考古学雑誌』第16巻第1号
 石井清司他 1992『木津地区所在遺跡平成3年度発掘調査概要』（奈良府埋蔵文化財調査研究センター）
 植野浩三 1993「日本における初期須恵器生産の開始と展開」『奈良大学紀要』第21号
 植野浩三 1998「五世紀後半代から六世紀前半代における須恵器生産の拡大」『文化財学報』第16集 奈良大学文学部文化財学科
 岸 熊吉 1959「大和における古代窯跡」『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報』第11集 奈良県教育委員会
 小島俊次 1965『奈良県の考古学』吉川弘文館
 白石太一郎 1977「生駒谷須恵器窯跡群とその遺物」『青陵』No.35 奈良県立橿原考古学研究所
 白石太一郎・亀田博 1984『三郷町 平隆寺』（『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第47冊 奈良県立橿原考古学研究所）
 関川尚功 1980『奈良県五條市引ノ山古墳群』五條市教育委員会
 関川尚功 1984「奈良県下出土の初期須恵器」『考古学論攷』第10冊 奈良県立橿原考古学研究所
 篁園勝男 1974「香芝町平野古窯跡採集の須恵器について」『青陵』No.25 奈良県立橿原考古学研究所
 田中重久 1938「平隆寺創立の研究」『考古学』第9巻第11号
 千賀 久 1982「北葛城郡香芝町平野窯跡群発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報』1982年度 第2分冊 奈良県立橿原考古学研究所
 中井一夫 1973「北田原古窯跡群」『奈良県観光』第202号、第204号
 西崎卓哉・中井公・立石堅志 1985「横井窯跡群の調査」『奈良市埋蔵文化財調査報告書』昭和59年度 奈良市教育委員会
 奈良国立文化財研究所編 1973『奈良山 平城ニュータウン予定地内遺跡調査概報』奈良県教育委員会
 奈良県立橿原考古学研究所 1996『勢野・辻ノ垣内古窯跡の調査』現地説明会資料
 錦好見・木村篤史 1988『生駒市遺跡分布調査概要』（『生駒市文化財調査報告書』第7集 生駒市教育委員会）
 錦好見・木村篤史 1989『生駒市遺跡分布調査概要』（『生駒市文化財調査報告書』第9集 生駒市教育委員会）
 林部均・重見泰 1999「生駒市高山町関西学術研究都市第3次試掘調査報告」『奈良県遺跡調査概報』1998年度 奈良県立橿原考古学研究所

植野：大和における須恵器窯跡

- 藤井利章 1984「生駒市俵口北須恵器窯発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報』1983年度 第1分冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 藤原学・中村浩編 1996『須恵器集成図録』第2巻 近畿編II 雄山閣出版
- 本村充保・重見泰 1998「生駒市学研都市（高山1号窯）第2次試掘調査報告」『奈良県遺跡調査概報』1997年度 奈良県立橿原考古学研究所
- 吉田恵二 1974「生駒市須恵器窯出土の土器」『奈良国立文化財研究所年報』1973 奈良国立文化財研究所

[付記]

本研究は、1997（平成9）年度奈良大学研究助成（研究課題：「奈良県における古代窯跡資料集成」）の成果の一部である。助成をいただいた大学当局に感謝申し上げます。

また、資料の収集および生駒山東麓一帯の窯跡群の内容については、本学文学部文化財学科学生、重見泰君の協力と教示を受けました。記して謝意を申します。